

M・フェスター他著『社会構造の変容と社会的ミリュー』

—— 解説と部分訳（仮説・問題設定・方法・結果） ——

M. Vester et. al. “Social Milieus in the social structural Change”.

—— Explanation and partial Translation ——

伊藤美登里*・久保田滋* 解説・訳

Midori ITO and Shigeru KUBOTA

<キーワード>

社会的ミリュー, 階級, 階層, ライフスタイル, ハビトゥス, 社会調査

<要 約>

ドイツの政治社会学者 M・フェスターは、彼が主催する大規模な研究プロジェクトにおいて、階級・階層に代わる概念としての「ミリュー」概念を用いた政治の調査分析を実施している。このプロジェクトの成果は、フェスター他著『社会構造の変容と社会的ミリュー』（2001年）において詳細に叙述されている。本稿（解説および翻訳）では、まず、この著作のおおまかな内容と、ドイツのミリュー研究にもとづいて実施した東京調査の概要を紹介し、次いで、フェスター他による著作のなかの、調査の仮説や問題設定および方法、そして調査の結果について書かれた部分の訳を掲載する。

【解説 (Erläuterung)】

ドイツの政治社会学者 M・フェスターは、彼が主催する大規模な研究プロジェクトにおいて「ミリュー」概念を用いた政治の調査分析をおこなっている。このプロジェクトの成果は、フェスター他著『社会構造の変容と社会的ミリュー (Soziale Milieus im gesellschaftlichen Strukturwandel)』(2001年)において詳細に叙述されている。

この解説においては、まず、フェスターらのこの研究を、1980年代以降ドイツで盛んになった「ミリュー」研究のなかに位置付け¹⁾、さらに彼らの著書の概要と彼らの研究に特徴的な点を紹介し、最後に、東京で実施したミリュー調査について紹介する。

1. 1980年代以降のドイツにおけるミリュー研究

ドイツ語の日常の用法において、個人を取り巻く「社会的環境、環境、生活状況」を意味する「ミリュー」は、そもそも19世紀に、同義のフランス語 milieu から輸入された (Dudenredaktion 2001: 526)。ここで使用する「ミリュー」概念は、しかし、1980年代以降のドイツ連邦共和国においてライフスタイル調査と不平等研究が取り上げ始めた意味における「ミリュー(「社会的ミリュー」とも呼ばれている)」で、一言で表現するなら、それは「考えを同じくする人々の集団」をさす (Hradil 2002: 222)。

1980年代以降の「ミリュー」研究は、まず、ライフスタイル調査において、SINUS Sociovision 研究所 (以下「SINUS」と略記) が、1979年に主としてインタビュー・データをもとに、特徴的な地位状況や価値態度および生活指向性をもつ八つのミリューを析出し、1981年にこれらのミリュー類型の量的データによる検証作業に着手し始めたことを嚆矢とする (Nowak u. Becker 1985: 14; Hradil 1987: 127)。

社会学の分野における、1980年代以降の主なミリュー研究としては、S・ハラディルの社会的不

平等研究、G・シュルツェの文化社会学的研究、フェスターらによる政治社会学的研究があげられよう。ハラディルは、「社会的ミリュー」の概念を社会学に導入した人物で (Vester u.a. 2001: 144)、1987年に出版された著書『進歩した社会における社会構造分析——階級と階層から状況とミリューへ——』において、階級・階層概念のかかえる現在的問題を検討し、硬直化した階級・階層概念に代わり、状況 (Lage) およびミリューというコンセプトを社会の不平等研究に導入する可能性を探った (Hradil 1987)。

「ミリュー」という術語を世に知らしめたのは、しかし、何といても、1992年に出版されたシュルツェの『体験社会』である (Geißler 2006: 109)。P・ブルデューに触発され、その批判的研究として登場した『体験社会』において、彼は、1980年代のドイツでは、日常の美学的感覚が、とりわけ学校教育や年齢をつうじて構造化されており、職業あるいは収入といった、階級・階層的な指標をつうじて構造化されることはより少なくなっていることを立証した (Schulze 2005)。

ここでその部分訳を紹介するフェスターらによる研究も、ブルデューのディスタンクシオンを批判的に摂取したミリュー研究に属する。ドイツ社会学におけるブルデューの積極的受容は1980年代初頭から始まるが、フェスターは、この受容にあたり重要な役割を果たした人物の一人である (Treibel 2004: 220-32)。フェスターらのミリュー研究においては、SINUSのミリュー・モデルがブルデューの社会空間と結合され、ミリューと政治的態度や投票行動との関係が分析された (Vester u.a. 2001)。

2. 著書の概要

2001年に出版されたフェスター他著『社会構造の変容と社会的ミリュー』は、1993年に出版された同名の著書を新たに書き直しさらに発展させたものである。そもそも、フェスターらの調査研究は、以前の階級社会の大集団が価値の変化と個人化とにより解消したという、一般に普及したテー

ぜを経験的に審査することを目的として計画され、フォルクスワーゲン財団の助成をえて1988年から着手されたものである (Ebd.: 11)。

彼らの著作は4部構成をとっている。「ミリュウと政治」と題される第1部では、研究成果の簡潔な要約が掲載され、続いて、ドイツ連邦共和国のさまざまな社会モデルが検討されている。

「理論と方法」と題された第2部では、まず、階級社会は解消したのかそれとも変容したのかについて、さまざまな理論の検討がなされている。ここで彼らは、新しく登場したいくつかのミリュウは階級縦断的ではなく、したがって階級社会は解消したわけではないという結論を経験的研究から導き出し、ミリュウの全体構造に対して「多元化した階級社会」という名称をあたえている。次いで、新たな社会構造を分析する理論用具として、「関係的階級理論」の最重要コンセプトがいくつか紹介・検討され、最後に、調査プロジェクトの問題設定や方法論そして調査の主要な結果が紹介されている。

第3部では、社会変化の鍵となる集団である「68年代」を中心として、これらの新しい社会・政治的ミリュウが古いミリュウから解き放たれ、しだいに西ドイツの社会構造の継続的一要素へと凝固していった道程が描かれている。さらに、彼らの親世代との比較をつうじて、新しいメンタリティが急進的にまったく別のものになったわけではないことも確認されている。

「社会空間の構造」と題する第4部では、社会空間の全体構造(全体のミリュウ)が論じられている。まず、戦後のドイツ社会における社会空間の開閉が歴史的に論じられ、次いで、社交スタイルと政治スタイルの基本的態度には対応関係が見られること、したがって、社交スタイルは基本的な政治的指向性の指標となりうることが示されている。さらに、調査結果から導き出された、西ドイツ地域および東ドイツ地域の社会的ミリュウの種類が掲載されている。

3. ミリュウと陣営

フェスターらのミリュウによる政治分析において特徴的なのは、「ミリュウ」の概念と「陣営(Lager)」の概念とを区別したことである。

彼らによれば、ミリュウは、「類似のハビトゥスをもつ集団を示す。この集団は、親戚関係あるいは近隣関係、労働あるいは学習をつうじて知り合い、類似の日常構造を発展させる。この集団は、互いに社会的凝集性をつうじて、あるいはまた、ただハビトゥスの類似の指向性のみをつうじて結びついている」(Ebd.: 24f.)。これに対し、陣営は、「ミリュウのように日常の生活態度と関連するのではなく、ある別の場、イデオロギー的・政治的な境界付けや闘争の場、別の固有の合法則性にしたがう場と関連する」(Ebd.: 25)。

ミリュウと陣営とのこのような分析的区別の理由は、「政治的態度のタイプは、SINUSのライフスタイル・タイプと必ずしも一致しない」(Ebd.: 445)という経験的事実にある。彼らはこう主張する。「従来の理論が頓挫するのは、通常、生活態度とライフスタイルをつうじて結びついているミリュウが、世界観的にあるいは社会政治的に単一の陣営を形成するにちがいないという期待においてである。ミリュウは、現実においてさまざまな陣営に分けられている」(Ebd.: 16f.)。陣営という「この政治的水準」は、「日常の階級ミリュウの場とは根本的に異なる独自の場である。この意味における階級 [=ミリュウ——引用者補注] は、…それが効力を生じ可視的になるためには、特別な動員と代理機関を必要とする潜在的可能性である」(Ebd.: 184)。

上の最後の文章は、K・マルクスの用法を用いて、ミリュウは即自的階級に相当し、陣営は対自的階級に相当するととらえるならば、理解が容易になる。フェスターらによれば、あるミリュウに属する行為者は、日常生活における自己の諸経験におうじて、さまざまな習得の過程とアイデンティティに到達し、その結果、さまざまな陣営に自己を組み込むことになる。この組み込みは、たいていの場合、任意ではなく、何らかのはつき

りした「力点」にしたがって生じる (Ebd.: 445f.)。よって、マルクスのいうところの即自的階級に相当するミリューは、そのまま対自的階級に相当する陣営になるわけではない。

例えば、フェスターらによる1991年の調査では、「急進的民主主義者」陣営は七つに分けられた陣営のうちの10.8%を占めた。この陣営は、主として、近代化された新しい社会的ミリューの上三分の一の層において見出され、高い文化資本と経済資とをもつことがその特徴であった。すなわち、この陣営には、オルタナティブ・ミリューの33.2% (オルタナティブ・ミリューの「急進的民主主義者」陣営全体に占める割合は6.6%、以下括弧内の数値はこれと同じ)、テクノクラート自由主義ミリューの25.5% (19.3%)、快楽主義ミリューの13.8% (15.7%)、保守上流ミリューの14.5% (9.6%) が属していた (Ebd.: 450-70)。

このように、陣営は、いくつかのミリューからそれぞれ何パーセントか流入して形成されるが、この流入は何らかの「力点」にしたがってなされている。

最後に、そうして彼らが導き出した中心テーゼはこうである。すなわち、A・ギデンズやU・ベックの仮定に反して、今日瓦解しているのはミリューではない。日常の階級文化は、むしろ、まさにそれがもつ適応能力と細分化能力ゆえに、並はずれて安定している。むしろ、まされてはいるのは、社会政治的陣営における特定の政党 (と知識人の党派) の覇権である。したがって、ドイツ社会が今日直面しているのは、価値変化の帰結としての「ミリューの危機」ではなく、エリートとミリューの間の隔たりが増大した帰結としての「政治的代表の危機」である (Ebd.: 13)。

4. 東京における政治とミリュー

日本におけるミリュー研究は、その理論や分析枠組み、およびドイツにおける調査やその分析結果の紹介が中心であった (高橋1994; 1997; 1998; 田中1998; 小野2000; 小松 2003)。日本社会をフィールドとした実証的な研究としては、ドイツ

のマーケティング・コンサルティング会社であるSIGMA社が1997年に行った調査が存在するが (大橋 2000)、日本の研究者が中心となった実証的研究の蓄積はいまだ乏しいといわざるをえない。しかし、現代ドイツにおける社会・政治変動を分析するために開発・発展してきたミリュー研究の分析手法は、現代日本における社会・政治状況を説明する実証研究においても極めて有用な方法を提供するものと思われる。そこで、筆者を含む研究グループは、ドイツにおけるミリュー研究を参考にしつつ、2005年に東京においてサーベイ調査を実施した (松谷他2006; 2007)。その目的は、東京におけるミリューの析出と、それによる政治行動・政治的態度の実証的解明である。具体的には「誰が石原慎太郎東京都知事を支持しているのか」「なぜ2005年衆院選で自民党が圧勝したのか」という問を立て、調査・分析を行った。この東京調査によるデータの分析及びその成果はいまだ中間的なものにとどまっているが、今後さらに発展していくことが目指されている。

以下で紹介する訳は、フェスター他著『社会構造の変容と社会的ミリュー』の204~250頁 (第2部の一部分) の抄訳である。訳出にあたっては、原著の節番号を変更している。

注

- 1) ミリュー研究の歴史にかんする詳細は、松谷他 (2007) の2節を参照のこと。

文 献

- Dudenredaktion, 2001, *Duden 7. Das Herkunftswörterbuch*, 3. völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl., Mannheim: Dudenverlag.
- Geißler, Rainer, 2006, *Die Sozialstruktur Deutschlands*, 4. Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Hradil, Stefan, 1987, *Sozialstrukturanalyse in einer fortgeschrittenen Gesellschaft. Von Klassen und*

Schichten zu Lagen und Milieu, Opladen: Leske + Budrich.

Verlag für Sozialwissenschaften.

Vester, Michael u.a., 2001, *Soziale Milieus im gesellschaftlichen Strukturwandel*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.

———, 2002, “Soziale Ungleichheit, soziale Schichtung und Mobilität”, Hermann Korte und Bernhard Schäfers(Hg.), *Einführung in Hauptbegriffe der Soziologie*, 6. Aufl., Opladen: Leske + Budrich, 205-27.

(執筆分担: 序文～3 = 伊藤, 4 = 久保田)

小松丈晃, 2003, 『リスク論のルーマン』勁草書房.

松谷満・高木竜輔・丸山真央・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・村瀬博志・町村敬志, 2006, 「劇場型選挙のプロレゴメナ——2005年総選挙における東京都民の投票行動と社会意識」『茨城大学地域総合研究所年報』39号.

松谷満・伊藤美登里・丸山真央・久保田滋・矢部拓也・樋口直人・高木竜輔, 2007, 「東京の社会的ミリューと政治——2005年東京調査の予備的分析——」『徳島大学社会科学研究』20号.

Nowak, Horst, und Ulrich Becker, 1985, “„Es kommt der >>neue<< Konsument“. Werte im Wandel”, *Form. Zeitschrift für Gestaltung*, 111: 13-7.

小野耕二, 2000, 『転換期の政治変容』日本評論社.

大橋照江, 2000, 「ライフスタイルの多様化と現代消費」藤竹暁編『現代のエスプリ別冊 消費としてのライフスタイル』至文堂.

Schulze, Gerhard, 2005, *Erlebnisgesellschaft*, 2.Aufl., Frankfurt am Main: Campus Verlag.

高橋秀寿, 1994, 「今日におけるドイツ極右現象の歴史的位相」『思想』833号.

———, 1997, 『再帰化する近代——ドイツ現代史試論 市民社会・家族・階級・ネイション』国際書院.

———, 1998, 「ドイツ『新右翼』の構造と『政治の美学』」山口定・高橋進編『ヨーロッパ新右翼』朝日新聞社.

田中紀行, 1998, 「現代ドイツにおける<文化と社会構造>研究——ライフスタイル研究を中心に」『社会学雑誌』15号.

Treibel, Anette, 2004, *Einführung in soziologischen Theorien der Gegenwart*, 6. Aufl., Wiesbaden: VS

【翻訳 (Übersetzung)】

1. 調査仮説——階級ミリューと階級メンタリティの長期持続

伝統的な自由主義経済学や正統派マルクス主義経済学の理論は、ただ一つの物質的・経済的な利害関心が行為を規定し、はなはだしい窮乏のみが闘争へといたらしめると仮定しているが、彼らの理論は、はるか以前から歴史の展開をつうじてその信用を失墜してきている。第二次世界大戦前の世界規模の経済危機は、いたる所で物質的な困窮をつくりだした。それにもかかわらず、それは、大陸ヨーロッパにおけるファシズム運動、スカンジナビアにおける社会民主主義的運動、そして周辺諸国における農業革命運動といった、非常にさまざまな社会運動を成長させた。それゆえ、独自の、ミリューに結びついた文化的伝統があるに違いなく、その伝統にしたがって似たような経験をこのようにさまざまに摂取するのであろう。

それと対立する理論も、そのような違いを解明することができない。このことは、1945年以降、豊かさが物質的ないし物理的な欲求を満たしたがために、ポスト物質主義的価値と理念的価値の「静かなる革命」の余地が生じたとする、R・イングルハートとA・H・マズローの仮定にあてはまる。また、物質的困窮という重圧がない場合には、ライフスタイルや考え方は完全に自由に選択されうるといふ、U・ベックの同様の仮定にもあてはまる。諸理念が行為を導くのであるなら、その場合、それらは社会的な力の場から、そして、この力の場において特定の場所あるいは経路が結果として生み出してしまふ、視野のゆがみから、完全に自由であるのだろうか。

これらの客観主義的理論と主観主義的理論とに反対して、M・メルロ＝ポンティは、第二次世界大戦の終了時におけるダイナミックな社会状況において、メンタリティ変容にかんする全く別の仮説を発展させた。それは、社会空間の開放という理論で、物質的ないし理念的な動機づけの理論の

代わりに、経験の理論を代替させる。メルロ＝ポンティは、次のようなことに注意を喚起した。すなわち、急進的な社会変革のための運動は、まさに、極度の抑圧と搾取をつうじて鼓舞されるのではなく、「社会空間の開放」をつうじて、すなわち市民的自由の増大とそれに続く生活水準の上昇をつうじて鼓舞される——事実、戦争終了後に経験したように。したがって、メンタリティの変容がどの方向をとるかを決めるのは、「経済的必然性」(あるいはその欠如)ではない。むしろ、社会空間の開放が、社会的ミリューを動機づけ、彼らの行為の可能性にかんしてすでに存在するレパートリーをより自由に展開させ、発展させ、そして社会的開放をさらに進展させる。

場と行為者のこの弁証法において、以前は目に見えず、隠れていた潜勢力が明示的な運動へと変化した。社会運動は、受動的な反応として登場したのではない。単なる飢餓からでも、あるいは特定の指導者によって動員された、政治的影響力の「資源」として登場したのでもない。社会運動は、能動的な社会的希求から生じた。この能動的社会的希求は、ミリューの文化的サブ構造において危険なものであったが、政治的・社会的権力関係によって抑圧されており、そして、フロイトの抑圧された心理的希求と同じように、ようやく帰還したものである。——抗議運動がこのようにサブ政治の水準へと追い出されるということは、冷戦の開始以降、もう一度繰り返されるはずであった。しかし、1960年代に新しい社会運動とミリューが成立したときには、この追い出しはもはや成し遂げられなかった。

メンタリティの変遷にかんするわれわれの研究において、われわれは、したがって、それぞれのミリューは、そのハビトゥス構成におうじて、それ自身のやり方で、そしてさまざまな個人的ヴァリエーションをもって、1945年以降の拡大した生活条件に反応したという仮説から出発する。

この仮説は、S・ホールや他のパーミンガムの「現代文化研究センター(CCCS)」の研究者が実施した、若者の階級文化にかんする経験的・理論的研究によって支持されたとわれわれは判断した。

彼らの発見は、戦後世代がけっして統一的な無階級の若者文化を発展させたわけではないと証明されたことであった。予め発見されていた様式の諸要素から自分たちのライフスタイルを新たに組み立てるさいに若者がしたがった型は、むしろ、彼らに特有な階級の状況を象徴的な型でもって克服したものであることが判明した。そして、その象徴的な型の基本的特徴は、両親の文化に呼応していた。「組み立てること」——C・レヴィ＝ストロースにしたがえば「プリコラージュ」——は、それゆえ、パッチワーク・アイデンティティのテーゼ、あるいは組み立てアイデンティティのテーゼが今日仮定しているような、恣意的なものではない。

このような基礎のうえに、われわれはハビトゥスの変態という仮説を発展させた。その仮説によれば、比較的若い諸世代のライフスタイルとハビトゥスは、完全に自由な、再帰的選択によってではなく、関係的に、支配的文化や親文化のハビトゥスの型との葛藤において生じた。そのさい、批判も、両親のハビトゥス型のレパートリーから供給された。したがって、比較的若いミリューのハビトゥスのヴァリエーションは、まさに、新しい外的条件へ順応せよという難問への挑戦をつうじて生じた、あの出身文化の家系図の、新たな分枝として理解されうる。

最後に、われわれは、社会空間における新しいミリューの推定上の場にかんする仮説を形成しなくてはならなかった。この仮説は、P・フォン＝エルツェンの論文とつながった。その論文において、彼は、新しいミリューを近代的被傭者として、あるいは、新しい教育と職業にとりわけ集中している「労働者全体の」部分として同定した。

この仮説も、他の仮説と同様、われわれの調査において根本的に証明されたが、調査はわれわれをその仮説をさらにこえる地点までいざなった。社会空間におけるこの場を見つけるために、われわれは、1991年にドイツの住民のサンプリング調査を実施した。その調査は、社会空間にかんするP・ブルデューのパラダイムにしたがって構造化されたものであった。そのさい、「社会的・政治

的」ミリューという二重概念でもって、不鮮明さを、ないしは未解決の問題をプロジェクトのタイトルに挿入するということが結果として生じた。新しい社会運動とそれに指向したミリューは社会諸集団から発生し、その社会諸集団はすべての社会階級に属する、そして「階級縦断的な」理念のみが登場したとする、運動研究の仮定をわれわれは疑った。——われわれが本書で公にする結果は、賢明な解答へと流れ出る。

一つには、新しいいくつかのミリューは、「社会的に」、實際上から下までの、すべての垂直的な階級ミリューないし階層ミリューに属する。その日常の生活態度において新しいミリューは、そのスタイルと好みに相当程度の垂直的差異が見られる。そこには、エリートと大多数のミリューとが後にふたたび互いに遠ざかることになる破損箇所も位置していた。

もう一つには、それらのミリューは、そのハビトゥスにしたがって、主として、社会空間の、左の「進歩的な」そして「近代的な」部分に位置付けられた。それらのミリューは、それゆえ、共通の社会的な箇所を有しているように思える。この箇所は、しかし、近代的な職業集団に関連付けられるわけでは必ずしもない。いわゆる「新しい職業」に属する者の約半分のみが、普遍主義的理念をもつ新しい社会的ミリューに属していた。新しい職業は、このミリューに属するための、必要ではあるが十分ではない根拠であった。「十分な根拠」は、全く別の水準において見出すことができた。すなわち、世界観的、あるいは社会政治的陣営の水準において。それは、とりわけM・R・レプシウスが階級超越的な連合として帝政期・ワイマール期の政治状況を歴史的に記述したのと同じであった。新しいミリューは、それゆえ、「社会的」あるいは生活世界的なつながりではなく、「政治的」あるいは世界観的なつながりであった。しかも、ただ一つの政党によって、最初にこのつながりがつけられうるものでも、ましてや長期間持続されうるものでもなかった。

このことによって、今日、社会的ミリューの場が変化する力学は相変わらず持続していることが

明らかとなった。ミリュウの近代化によりますます増大した解放的で権威批判的な潜勢力にまさに直面して、古い社会・政治的エリートと新しいそれのと覇権は、これまで以上に不確実である。権威主義的な政治指導様式は、そこから帰結する代表の危機を克服せず、ただ社会運動が新しい形で繰り返される事態を引き起こすことになるであろう。

2 調査プロジェクト——問題設定・方法・主要な成果

関係のパラダイムの方法論的置換は、容易ではなかった。ブルデューの明示的な方法論は存在せず、いくつかの領域にとってもそれは欠けている。しかし、理論的パラダイムの明白な公式化の基礎のうえに、すでに存在する一連の個々の理論、方法、そして技術をふたたび取り上げ、パラダイムを経由してそれらを相互に関連付け、技術的にも概念的にもさらに発展させる可能性がわれわれには残されていた。

本節が総括的に叙述していることは、問題設定がいかにして方法上の前進へと転換させられ、どのような方法が用いられ、さらに発展させられたか、そしていくつかの方法の結合が全体としていかに構造化されたかということである。最後に試みられているのは、この調査方法の性能を、社会空間における諸関係の構造に対するいくつかの成果を用いて叙述することである。そのさいとりわけ問題とされるのは、ミリュウと陣営の相対的位置であり、社会空間における重要な組み込みライン(2.4.2および2.4.5)であり、歴史的伝統ライン(2.4.2)と非同時性(2.4.4)であり、性による分業ないし労働市場における分節化と密接に結びついている、ミリュウの内的不平等構造である(2.4.3)。

総量からすれば、タイプを形成するメンタリティ分析がもっとも重要であった。それは、しかしながら、ブルデューの拡大された多水準分析にしたがった場の分析のなかに埋め込まれていた。それにしたがって、仕事は、三つに分けられた平

行する筋において遂行された。これらの筋は、後に統合的な最終部分へとまとめられ、先へ進められた。考察の対象は、まず第一に、いわゆるオルタナティブな、あるいは新しい社会的ミリュウ、すなわち、それらの成立史とそのメンタリティ形態であった。両方とも、地域的そして全体社会的な職業の構造変化の分析のなかに埋め込まれた。最後に、調査研究のひろがりには、新しい社会的ミリュウを、全体社会の、そしてそのすべてのミリュウと陣営の多次元的な文脈において配列することができるよう、旧西ドイツ社会全体へとひろげられた。これに役立ったのは、とりわけ、1991年におけるサンプリング調査、および後に行われた一連の分析と後に続く研究であった。

全体の分析に必要な尽力と比較しても相当に、そして継続的に尽力したにもかかわらず、多くのことが依然として仮説の域をでていない。しかし、何といても、初の一般的な階級ミリュウ地図が仕上げられ、他の高度に発展した社会のミリュウ配置との比較が可能になった。同様に可能となったのが、陣営における変化した亀裂の構造を初めて突き止め、階級ミリュウの地図に組み込むことであった。

2.1 世代間におけるハビトゥスとメンタリティの変遷

「ハビトゥスとライフスタイル」というプロジェクト部分の問題設定はこうであった。オルタナティブ・ミリュウと新しい社会運動は、新しい「普遍主義的な」メンタリティと実践を代表しており、もはや階級ミリュウと結びついてはいない(ベック-ギデンズ・テーゼ)というのは事実と合致するのか。

この問いは、三つの選ばれた地域において、244の標本をとった、自由回答方式の、二世帯を対象とした生活史インタビューによって探られた。

2.2 職業・経済的な場の力学

「職業構造と社会構造」というプロジェクト部分の問題設定はこうであった。このようなメンタリティの変遷は、職業的地位の変遷とどう結びつ

いているのか。そして、この職業的な変遷は、西ドイツ社会の全体経済的な場のどこに位置付けられえたのか。

この問いは、とりわけ、三つの選ばれた地域における、1950年以降の職業的および経済的な場の変遷の分析をつうじて、およびまた、西ドイツの代表的なセンサス・データの基礎のもとに追究された。

2. 3 新しい社会・政治的ミリュー

「ミリューと社会的実践」というプロジェクト部分の問題設定はこうであった。1960年代末以降の新しい社会運動のミリューは、その社会的まとまりとアイデンティティをいかに発展させたのか。

この問いは、いわゆるミリュー生活史をつうじて、すなわち、三つの選択された地域における事例調査をつうじて探られた。それらは、新しい社会運動とミリューとが社会政治的陣営の地域的な場においていかに形成されたかを示していた。われわれの仮説は、新しいアイデンティティが職業領域の変化と結びついていただけでなく、社会空間の一般的開放や世代間の陣営対立とも結びついていたというものであった。

2. 4 社会階級の全体的形状の変化

四番目のプロジェクト部分は、とりわけ、ブルデューの多次元的概念にしたがって作られたサンプリング調査に依拠した。このプロジェクトは、新しい社会的・政治的ミリューというパースペクティブを、旧西ドイツ社会の全体構造および全体力学へと拡大した。というのは、われわれの仮説によれば、新しいミリューの発展は全体の発展が探られなくては理解できないであろうからであった。

問題設定は以下のとおりである。すなわち、上の三つのプロジェクト部分において別個に探られたさまざまな場の力学は、どのように関連しているのか。質的調査がなされたミリューは、旧西ドイツ社会の全体構造にとってどの程度代表性があるのか。それらミリューの大きさと位置付けは、他の社会的ミリューとの関連においてどのよう

であったのか。とりわけ、侵食理論家と個人化理論家の三つの特殊なテーゼは、どの程度あてはまるのか。

- (1) 脱連結テーゼ。特定の職業集団にとって典型的なメンタリティは、(まだ)存在するのか、あるいはメンタリティは、ライフスタイルの自由な選択をつうじて、経済的階級状況から「連結を外された」のか。
- (2) 社会的凝集性の瓦解というテーゼ。階級社会におけるミリューによる結びつきの代わりに、社会が解消し、つながりのないバラバラの個人があらわれたのか。
- (3) 社会的方向付けの断片化というテーゼ。社会的ミリューは溶解して、つながりのない部分集団になったのか、それとも、人びとを結びつける、ミリューによる方向付けあるいは陣営による方向付けがまだ存在するのか。

2. 4. 1 サンプリング調査の計画と評価のために

「ドイツにおける社会的・政治的ミリュー」調査は、さまざまな研究財団の支援でもって、1991年夏に「マールプラン」調査研究所によって行われ、それから、徐々にわれわれによって本書のためにそして続く諸研究のために評価有効活用された。

ミリューと陣営とはより深い基本的態度と後にまで残る歴史的な伝統ラインとをその根底にもっている—われわれはそれが証明されたことを発見したように—、ゆっくりとしか変化しないし、比較的大きい時間幅でしか変化しない。研究の成果は、したがって、1991年以来現在性を失っていないが、特に、下位集団の範囲は、これまでにくらか移動した。すなわち、伝統ラインは同じであるが、さらに分化した。この分化の始まりは、すでに1991年の調査において目に見えるものとなっていた。

SINUS 研究所の調査は、タイプ分けされたミリューの人口比率が入れ替わることを発見したのであるが、この調査は、何といても、それがとりわけライフスタイルの美学を究明しているのもので、政治や社会的まとまりや生活状況に対しては、非

常にわずかの「解説的指標」しか含んでいない。

ここにあるのは、しかしながら、われわれ独自のサンプリング調査の重点と枠組である。このアンケートは、社会空間全体のタイプの構造と場の構造とをきめ細かく伝えるための、初の単独の調査道具である。そこにおいて二つの目標、すなわち、新しい社会的ミリューを配列するという目標と、新しい社会的な紛争ラインを解明するという目標とが結びつけられている。

サンプリング調査は、旧西ドイツの社会空間全体の類型学的場を究明することを期待されていた。インタビューは、被調査者の協力能力への顧慮から、最大一時間をこえてはならなかった。このような制限にもかかわらず、質問紙はブルデューの社会空間のあらゆる次元をとらえなくてはならなかった。すなわち、彼の四つの軸にしたがった社会空間の分化をとらえなくてはならなかった。それぞれの被調査者は、それゆえ、四度、位置付けをされなくてはならなかった。

- (1)水平的には、機能的分業の軸へ
- (2)垂直的には、ヒエラルキーをなす支配地位の軸へ
- (3)標高的には、制度的分化の軸へ、そして
- (4)時間的には、歴史的非同時性の軸へ

三番目の軸が社会的実践の五つの相対的に自律した水準にしたがって分化しており、そしてそれぞれにおいてさらに下位区分されていたことによって、次元の数は増えた。

- (3a)日常の水準において、ハビトゥスと実際の生活様式の形態にしたがって(キーワード:「ミリュー」、「メンタリティ」、「凝集性」、「実践的文化」)。
- (3b)政治的そして世界観の水準において、社会政治的指向性と実際の政治参加にしたがって(キーワード:「陣営」、「イデオロギー的亀裂」、「高級文化」)。
- (3c)協同的水準において、職業の、宗教の、そして他の連盟や代表部との関係にしたがって(キーワード:「協同的代表」)。
- (3d)職業的地位と社会的状況の水準において、経済資本、文化資本、社会資本の資源にし

たがって(キーワード:「職業階級」、「ゲゼルシャフト結成」、「ゲマインシャフト結成」)。

- (3e)国家の諸制度の水準において、政治的に規定された、(不平等な)地位の配分におうじて(キーワード:「政治的代表」、「法/権利」、「扶養階級」)

これらの水準あるいは場の区分は、質問紙の理論的そして方法論的構想設計の要の点となった。場は、直接的に互いを互いから導き出すことができないので、ただ一つの水準(経済的水準)から、そしてただ一つの軸(垂直軸)から出発する、従来どおりの階級・階層分析におけるような手続きはとられなかった。それぞれの場は一定の固有の論理にしたがい、この論理は他の場がもつ固有の論理と対立関係にある。したがって、それぞれの場は、他の場から分離され、その場の固有のカテゴリー水準において探られなくてはならない。社会的な分割原理は、文化的な場においては、経済的な場あるいは政治的な場においてはとは別様に公式化される。それぞれの場に対して、したがって、固有の概念的コンセプトが探られなくてはならなかった。そしてこのコンセプトは、ふたたび、向自的に、「操作化」されなくてはならなかった。すなわち、適切な問いの複合体へと翻訳されなくてはならなかった。

アンケートの分析に対しても、新たな道が探られなくてはならなかった。目標は、それぞれの場ないしその下位の場に対して、多次的で類型学的に形作られた図を獲得することであった。それぞれの空間図から、行為者集団の空間的配分とそれらの間の境界線が読み取られなくてはならなかった。次のステップにおいて、空間図が組み合わされなくては、あるいは、ブルデューがかつて表現したように、さながら羊皮紙でできた弓のごとく、重ね合わされて置かれなくてはならなかった。このような総合をつうじて、さまざまな場の間の符合ないし相同性(ホモロジー)が認識可能なものとされなくてはならなかった。例えば、ハビトゥスがどのような経済的地位と(あるいはどのような政治的陣営指向と)どの程度対応するの

かといったことである。このようにして、今日、メンタリティが社会状況から独立するようになった(あるいはより独立的なものになった)というテーゼが検証されなくてはならなかった。

すでにわれわれの244の詳細な質的インタビューにおいて注意を引いたことは、被調査者が、彼らの暮らしぶりの対立を境界付けの形で表現するよう自発的に努めていたことであった。すなわち、他の社会集団から一線を画すことをつうじて自分を正当化することに努めていた。間もなく明らかになったことは、この境界付け欲求は、個々の特徴にとってのみならず、全体としての暮らしぶりに、すなわちさまざまなタイプの生活の方法や、それどころかハビトゥスのさまざまなタイプにもあてはまるということだ。この自己タイプ化に、われわれのタイプ形成手続きも指向した。発見されたハビトゥス・タイプにかんするわれわれの一覽的なまとめが具体的に説明しているように、それぞれのハビトゥスは一つの症候群として記述可能である。すなわち、相互に関連しあう個々の

メンタリティ諸特徴や分類図式や評価付けの型の組み合わせとして記述可能である。

今や重要なのは、すでに質的な調査の部分において複雑で労力のかかるものとなっていたトポロジー的症候群発見のためのわれわれの方法を、統計的なデータ処理に転用する、実行可能な道を見つけることであった。

ここでわれわれの助けとなったのは、われわれのプロジェクトの初めに、時代的に、価格の安い「パーソナル・コンピュータ」の普及とそれに対応した計算プログラムの第一波が合流するという僥倖であった。古い、線型的な統計は、個々の変数のみを結合させるか、せいぜいのところ、尺度を経由して、個々の態度の次元を測ることができたにすぎない。新しい技術は、多次元的で「多変量の」統計的計算手続きへの移行を可能にした。これらの手続きによって、多数で多様な「主観的」態度変数を——以前であれば想像できなかった——秩序付けられた多次元的空間像とタイプ像とへ加工することが可能となった。

表1 代表調査のアンケート道具 (概要)

1. メンタリティと政治

日常生活態度の水準 (1.1-1.3) と社会政治的指向性の水準 (1.4-1.6)

調査テーマ	問番	質問項目	質問パターン	時間(分)
1.1. ハビトゥス (メンタリティ・タイプ)	1	日常生活態度の諸領域に対する基本的態度(労働・自由時間の動機、快楽・禁欲選好、両性の関係や家族に対する考え、技術の進歩や政治に対する考え)	「ミリュール指標」: 4段尺度をもつ44の言明(カード文)の基準値。これらによって、9つの社会的ミリュールへと被調査者を分類する	12
1.2. 社会的凝集性(社交スタイル)	7	家族・友人・知人との交際の仕方に対する基本的態度	4段尺度をもつ39の言明(自己記入のための質問紙)の基準値	10
1.3. 自由時間(社交実践)	13	社交的、社会的、政治的諸活動の頻度と広がり(社会的位置と範囲)	6段尺度をもつ22アイテム(リスト)の基準値	6
1.4. 陣営	12	社会的および政治的秩序に対する基本的態度(社会正義、政治参加および代表、社会政治的「亀裂」)	4段尺度をもつ45の言明(リスト)の基準値	
1.5. 政治参加	P	政治と公的生活の時事的出来事に対する個人的関心の度合い	5つの選択肢(リスト)からなる問い	0.5
	4	好きな政党	5つの政党の載ったカード文。被調査者は、それらの政党を好きな順に並べる	6
	8	1987年の連邦選挙にさいしての投票行動	9つの選択肢(リスト)からなる問い	0.5
	14	1990年の連邦選挙にさいしての投票行動	12の選択肢(リスト)からなる問い	0.5
1.6. 社会政治的伝統ライン	15b	父親の労働組合員歴	自由回答	0.5

2. 社会状況と位置

ゲマインシャフト結成 (2.1-2.4) とゲゼルシャフト結成 (2.5.-2.6.)

調査テーマ	問番	質問項目	質問パターン	時間 (分)
2.1. ゲマインシャフト結成の型	2	家族状況	4つの選択肢からなる問い	0.5
	9	パートナーとの確固たる関係	自由回答	0.5
	3	目下の居住形態 (パートナーと、両親ないし子供のもと、同居共同体、一人暮らし)	4つの選択肢からなる問い	0.5
	L	世帯において常に生活している人の数	自由回答	0.5
	M	世帯の年齢構成	自由回答	1
2.2. ゲマインシャフト結成の状態	A	性	申告はメモされた	-
	B	年齢	自由回答	0.5
	16	宗教/地域共同体	4つの選択肢からなる問い	0.5
2.3. パートナーの社会的地位	10	パートナーの現在の活動 (社会法上の地位)	11の選択回答基準値	0.5
	11	現在の、ないし最後に行ったパートナーの職業	自由回答 (役所の職業統計の二桁コードにしたがいコード化)	0.5
2.4. 地域ミリュー (地域、居住地、住居)	Q	住居の大きさ (家における部屋数)	申告が調査者によってメモされた	-
	-	土地の大きさ (政治的)	居住地の大きさと州にかんする申告を土地番号 (サンプル・ポイント) から算出	-
	-	州		
2.5. 被調査者の職業的地位 (文化および経済資本)	C	最終学歴	7つの選択肢 (リスト) からなる問い	0.5
	D	最終的な職業訓練の修了	6つの選択肢 (リスト) からなる問い	0.5
	E	現在の活動 (社会法上の地位)	12の選択肢 (リスト) からなる問い	0.5
	F	現在の、ないし最後に行った職業	自由回答 (役所の職業統計の二桁コードにしたがいコード化)	0.5
	G	職業における活動領域 (製造、運輸、事務所労働等)	17の選択肢 (リスト) からなる問い	0.5
	H	現在の、ないし最近の職業上の地位	26の選択肢 (リスト) からなる問い	1
	K	生計の源泉	10の選択肢 (リスト、2つまで回答可能) からなる問い	1
	O	個人の手取り収入 (月)	12の選択肢 (リスト) からなる問い	1
	N	世帯の手取り収入 (月)	12の選択肢 (リスト) からなる問い	1
	2.6. 両親および祖父母の社会的地位 (世代間移動)	5	父母の最終学歴	7つの選択肢 (リスト) からなる問い
6		父母と双方の祖父の最終的な職業的地位	26の選択肢 (リスト) からなる問い (職業が分類されえない場合、正確な職業名称が問われメモされた)	1 - 60

タイプと場の多次元性が必要としたことは、また、何といたっても、それぞれの探られた類型に対して、質問すべき変数を包括的に秩序立てて質問票に入れることであった。そのようにして登場したのがメンタリティの類型や、凝集性の型や、政治的基本態度などの類型にとっての包括的な指標で、それはすなわち、45までの文のセットである。諸指標の文は、そのさい、それが方法論的に必須であるように、先行する質的調査から得られた¹⁾。

指標形成の手続きと多変量タイプ分析とのこの新しい組み合わせは、ハイデルベルクの SINUS 研究所による生活世界調査の草分けの業績である。多くの成果をもたらすこの革新的方法が、伝統的な方法とともに成長した既存の社会科学調査からの抵抗をしばしば受けたのは、偶然ではなからう。後にドイツ社会学会の会長となった、S・ハラディルによる SINUS のアプローチの肯定的な功績評価は、しかしながら、われわれを動かし、この新しい方法を習得させ、そして SINUS 研究所の助けと助言でもって、ここで書かれている代表アンケートに適用させた。

質問票におけるすべての問いは、表1において概念的に再現されている。質問票は、その内容において——その実際的な構成においてではなく——四つの空間軸にしたがって構造化されている。

一覧は、四つの、さらに下位区分可能な場の水準(いわゆる第三の軸)にしたがって構成されている。すなわち、日常の生活様式(1.1-1.3/ハビトゥス、凝集性など)、社会政治的指向性(1.4-1.6/陣営、参加など)、ゲマインシャフト結成の様式(2.1-2.4/共同生活の形態、生得的所属、地域ミリューなど)、そしてゲゼルシャフト結成の様式(2.5-2.6/文化・経済・社会資本)²⁾。

2.4.2 社会空間におけるミリューと境界線

社会的ミリューにおいて、われわれが分析という目的のために分離して扱ってきた、さまざまな水準と場が、実践的な関連、個人とその社会集団によって調整されるべき関連の契機として、ふたたび出会う。ある一つのミリューは、したがって、つねに、いくつかの場の水準が組み合わせら

れたものをつうじて記述される。技術的に、われわれは、あるミリューへの所属を、まず、メンタリティ・タイプによって定義付ける。その後、われわれは、どのような職業上の地位ないしは社会的状況をミリューの算出された所属者が占めるのか、そして他にどのような特徴を持っているのかを確定する。今や認識されるのは、メンタリティのタイプが特定の「客観的」状況と結びついているのか、あるいはそれとの連結が外されているのかということである。

結果は、矛盾を内包している。一つには、それぞれのミリュー・タイプないしメンタリティ・タイプの所属者が圧倒的に社会空間の特定の地帯に集中しているということ、よって、「客観的な」階級的地位から完全に解放されたわけではけっしてないということが、われわれには見てとれる。他方で、何によってこの階級的地位がその時々で正確に規定されるのかは、簡単には認識できない。いずれにしても、それは、ポスト産業社会の理論に反して、役所の統計が行っているような、労働者と職員の間、あるいは製造業とサービス業の間の差異によって規定されてはいない。民衆階級の大きなミリューは、通常、その双方を含み、しばしば同時に小規模自営業の一部をも含む。明らかに、職員の地位も第三次産業化も新しいミリューの境界にしたがって移動してはいなかった。

その代わりに、ミリュー間の経験的境界線は、ゆるいが、しかし重要な形態において、ブルデューの資本諸次元をたどる。

四つの境界線は、ブルデューの社会空間におけるミリューの、まだ相対的に分かりにくい配置をより簡潔に形成するのに——もっとも、より様式化されもするのだが——適している。図において、われわれは、この「亀裂」をさまざまな「階級段階」と「階級分派」を互いに区切る水平線と垂直線として描いた³⁾。

この研究部分の主要な成果は、新しいメンタリティが、古いそれとは完全に別のものであるわけではけっしてないということだ。大いなる被働者の中間のミリューは、確かに、とりわけ個人的な自己責任の価値を強調する。しかし、彼らの内的

凝集性も社会的公正に対する彼らの関心も消滅してはいない。ライフスタイルの外面的な特徴が急激に変化したために、変化の機能原理におうじて、メンタリティの基本的な構えもそれと同時に変化したという幻想を育ててしまった。ライフスタイルの外面的な特徴ややり方が急速に循環することは議論の余地のないことだが、それは目新しいことではない。モードにかんする有名な「浸透滴下効果」をつうじて、これらの特徴は、社会空間の上方に位置するトレンド・セッター・ミリューによって演出され、より下のミリューに引き継がれる。他と一線を画することを可能にするために、上方のミリューは、再三再四、新しいスタイルを公表しなくてはならない。そうすると、そのスタイルがふたたびシンボルの循環のなかに入る。この区別のためのシンボルがもつ意味は、しかし、その根底に横たわる好みの基本姿勢と同様、ただゆっくりと徐々にしか変化しない。

2.4.3 個々のミリューの内的不平等

われわれが見出したことは、それぞれのミリューは、その内部において追加的な分断線があり、それによって、とりわけ労働市場の性による分節化という線によって、構造化されているということだ。

2.4.4 「歴史的非同時性」

社会的ミリューの歴史的な性格は、今日でもまだ、さまざまな形であらわれている。とりわけ顕著なのが、権威と結びついた小市民的なメンタリティが、それに対応する「客観的な」経済的基盤、すなわちささやかな身分的ないし市民的な資産が、歴史上減少し、大半のミリュー所属者はもはやそれを自由に使用することができない時代に、右端のミリューにおいてまだ広まっていることだ。この原因は、いったん獲得されたハビトゥスの歴史的持続能力、慣性の法則のみに帰せられるわけではない。それはまた、相同性（ホモロジー）の効果、さまざまな種類の職業領域が構造的に類似していることの効果でもある。われわれの職業システムにおいていまだに存在しているのが、以下の

ような職業領域、すなわち、すでに公的には合理的で、資本主義的な経営形態をもつにもかかわらず、著しく身分的なヒエラルキー構造と、著しく身分的な文化資本および経済資本の装備構造をもつ職業領域である。われわれが推測できるのは、あの比較的古い身分的ミリューに属する比較的若い世代が、労働者や職員としてこれらの職業領域に移ったということ、というのはここでは同じようにヒエラルキー的で従属的な態度が期待されたからだということである。このことは、通常、あの再編戦略、すなわち、特定のハビトゥス・タイプにおいてあてがわれ、家族によって一心不乱に追求された再編戦略と対応する。

Th・ガイガーは、社会構造のこのような不均質性に鑑みて、さまざまな歴史的生産様式に由来する歴史的断層について、あるいは層化原理の多元性についても語っている。戦後社会において彼が見たのは、例えば、一つの社会における、身分的、産業資本主義的そして福祉国家的な層化諸原理であった。このことは、ある一つの社会において、別の社会をほんの少しだけ先取りするような、未来の生産様式の諸要素もすでに用意されているということを含意する。

このことが今日あてはまるのは、とりわけ、中年世代および若い世代の近代化されたミリュー、とりわけ業績指向の被傭者ミリューと近代的労働者ミリューである。それらは、何といても、住民の四分の一を占める。それらは、かつて、自負をもち、専門技能をもった労働者の運動の核を提供した、古い熟練工ミリューの末裔である。まさにこれらの価値——自己責任と勉強熱心——が、より近代的な労働者の職と職員の職への再編を動機付け、そしてまた容易にした。ここでもまた重要なのは、相応の職業的地位への再編であり、それはまったく別のハビトゥスを前提とするようなものではなかった。

「典型的な」社会状況と「典型的な」メンタリティとの連結が外されたというテーゼは、したがって、このような再編により、新しいがしかし「典型的な」——なぜなら相応であるので——社会状況と関連している可能性がある。メンタリ

ティは、調査結果によれば、ただ相対的にしか変化していなかった。

2.4.5 イデオロギー的陣営の空間的位置

社会政治的な基本的態度に対する指標の助けもって、われわれは、最後に、以下のことを確認できた。すなわち、社会政治的指向性をもつ、あいかわらず大きな諸陣営が存立し、その諸陣営の間で重みが増している。なかんずく、実際に二つの新しい陣営が登場し、そこにおいては、新しい社会的ミリューの諸価値が支配的である。それらの陣営は、1991年においては人口の約四分の一を占めていた。

多平面アプローチによってわれわれが確認できたことは、どのような職業集団やミリューのタイプがこれらの陣営において代表的であるかということだった。さしあたりわれわれが発見したことは、近代的でとりわけ専門的知識を必要とする新しい職業がこの陣営において——より近代的なミリューにおいてと同様——平均以上に見出されたということであった。しかし、それらの職業は、他のミリューにも分散していた(新しい職業に属する者の約半分が、人口の残りの四分の三に属していた)。職業の近代化は、それゆえ、新しい陣営メンタリティの唯一の創始者としては見なされない。われわれの事例調査が証明したことは、むしろレブシウスの研究と似ていて、諸陣営の境界線が、とりわけ(世代間、ミリュー間の)日常的対立と(イデオロギー諸陣営間の)政治的闘争という生活史上の経験をつうじて登場したということであった。

もう一つには、ミリューへの陣営の組み込みが証明したのは、新しい陣営が、社会の階級亀裂のあらゆる諸段階において、主としてミリューの前衛諸分派間の一種の連合として登場したということであった。しかも、1991年の調査が示したことは、新しいいくつかのミリューを一つの陣営ではなく、二つの陣営(「社会統合者」陣営と「急進的民主主義者」陣営)においてふたたび見つけ出したことにより、すでに境界線が、1999年に初めてSPDの代表O・ラフォンテーヌと彼の後継者G・

シュレーダーとの間の亀裂において象徴されたような境界線が、危険なものとなっていたということだ。

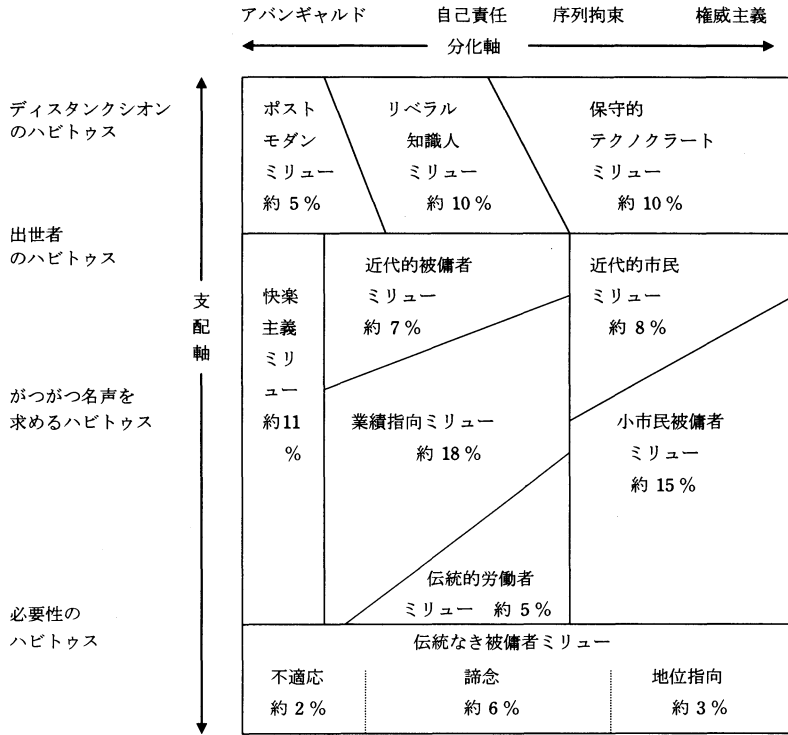
【訳注】

- 1) これらの変数に対し、個々の態度の諸特徴の同定するために「因子分析」が、完全な態度タイプの同定するために「クラスター分析」が用いられた。
- 2) この調査は、1991年7月に行われた(面接法)。サンプルは「西ドイツおよび西ベルリンにおける14歳以上のドイツ語を話す住民」(2684ケース、層化多段抽出)。
- 3) 次頁に示すミリュー図は、その一つである。

* 訳は基本的に伊藤が、訳出部分の検討と用語調整は久保田と伊藤が共同で行った。

* 翻訳にさいしては、著者代表のフェスター氏に快く承諾していただき、また出版社のズールカンパ社にも承諾の交渉していただいた。記して厚く謝意を表したい(Danken möchten wir an dieser Stelle Herrn Professor Doktor Michael Vester und Suhrkamp Verlag, die uns die Genehmigung der teilweisen Übersetzung des Buches >>Soziale Milieus im Gesellschaftlichen Strukturwandel<< erteilt haben.)。

図1 1995年旧西ドイツ地域の社会空間における日常生活態度のミリュール



(Vester 2001: 49) より伊藤が作成